
空虚な少年

タイガー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空虚な少年

【Nコード】

N8046X

【作者名】

タイガー

【あらすじ】

名家であるモルガン家に生まれたアダムは周りから期待されていた。しかし、彼には魔力がなかった。彼は周りからどんどん見放されていき孤独となった。そんな逆境に打ち勝ち、力を手に入れた少年の物語。

始まり（前書き）

初めての作品なのであまりよろしくないとありますが読んでいただければ幸いです。

始まり

小さな部屋の片隅にアダム・モルガンは膝を抱えて座っていた。これから身に起こる事を考えながら身体を震わせている。

ガチャ

その音にアダムはビクツとした。その音が自分の孤独の始まりと知っているからだ。

「アダム準備はできたか」

男は実の息子にまるで他人のように語りかけた。

アダムは父の口調の変わり様に驚いたが、予測していたことなのでそれほどショックは大きくなかった。

アダムはゆっくり腰を上げると準備していたバックを手に取り他人同然の父のもとへ向かった。父と息子は寝ているアダムの母と弟を起こさないようにゆっくりとした足取りで階段を下っていった。

玄関に着きアダムはお気に入りの靴をゆっくりとした動作で履いた。

二度とこの玄関で靴を履くことはないと思うとどうしようもなく悲しい気持ちになったが、それは自分にとって第二の人生の始まりを告げる行為だと思い、泣くのを堪えた。そんな彼の後姿を見つめる父の眼には悲しみの気持ちなど微塵も映っていなかった。

ようやく靴を履き終えたアダムは名残惜しそうに立ち上がり、扉を開け、外に出た。

バックを片手にしているアダムに父はいった。

「二度と私達の前に現れるな。そして金輪際モルガン家を名乗ること」

とは許さん」

その言葉を聞き、自分が今まで父と思っていた人は何だったのだろうと考えた。しかし、答えは出なかった。そして、アダムは闇の中に消えていった。

アダムは名家といわれるモルガン家に生まれた。主のデール・モルガン、母のジュリア・モルガン、弟のリッキー・モルガンと一緒に暮らしていたがある出来事がきっかけでそれは崩れ去ってしまった。

それは七歳の時に行った魔力検査である。

魔力検査は七歳になると必ず受けるものであり、国の義務でもある。それによって魔力の量や性質を見分けるのである。そして、その人の性質に合った教育を受けることができる。魔力の量は人によってそれぞれ異なってくる。遺伝性のものであれば、努力で増えることもある。

しかし、アダムは例外だった。魔力が多い、少ないの問題以前に魔力がなかったのである。

アダムはその事を知った時絶望した。なぜ自分なのか、と。そんな彼に周囲はさらに追い討ちをかけた。名家の子なのに魔力がないなんて、と彼を責めた。まだ七歳であった彼にとってそれはあまりにもつらい現実だった。

アダムが生まれた時周囲は彼に、将来はお父さんのように強くなるんだろっねえ、と口々に好き勝手いった。しかし、彼が魔力がな

いと解ると、周りは手のひらを返したように彼に寄り付かなくなつた。媚を売っていた事に気付いた彼は二重のショックを受けた。

名家の者として生まれて将来は約束されてはずであつた。それがいとも簡単に崩れ去つてしまつた。この時アダムは魔力のない自分に存在価値を見失つてしまつた。

家の主であるデールはモルガン家の実力が疑われていることに頭を悩ませた。最も苦しんでいる息子のことを考えずに。今の彼にとつては息子のことよりも、代々名家として受け継がれてきたモルガン家のプライドの方が大切だったのである。

そして考えた末にたどり着いた先の結果が一族追放だったのである。

自分勝手な話だと思つた。しかし、自分がここにいてもいない者として扱われるだけだと思い、一族追放の件を承諾した。その時八歳のアダムはいつか必ず見返してやると決意した。そして、一族追放の件を知らないジュリアとリッキーに何もいわず出て行つたのである。

力

とある山奥の一角に奥が深い洞窟があった。その洞窟には生き物が一匹もいなかった。洞窟以外の場所にはいるのにだ。それは生き物達その洞窟を避けるようにして生活していたからだ。なぜなら、その洞窟に入ったら最後二度と帰って来れないと知っているからだ。

そんな洞窟の前に一人の少年が立っていた。家を数日前に追い出されたアダム・バーグである。彼は今後アダム・モルガンではなく、アダム・バーグと名乗ると決めた。自分が最も尊敬している祖先の名前から取ったのである。

アダムは自分もいつか彼のようになるんだと心に決めていたが、それは叶わぬ夢となってしまうた。自分に魔力がないのではしょうがないと言い聞かせるも、どうしても諦めたくないという気持ちが先行してしまうため、彼は力を求めてここに来たのである。

生き物達から恐れられるからには必ず何かとあると信じてアダムは来た。死ぬかもしれないと思いつつも、失うものは何もないと自分に言い聞かせ心を落ち着かせた。

生き物が寄り付かないことは人間も知っているため、彼らも洞窟に足を踏み入れたことはない。そのため、ここに関する情報は皆無である。情報が少しもない事にアダムは恐怖を感じたが、誰も知らない恐怖をこれから自分が初めて知ると思うと優越感が沸いて出た。

「よし、入るぞ」

アダムは自分に喝を入れるために頬を両手で叩いた。

洞窟の中は想像していた通り静かであり、足音がよく聞こえる。

先に進んでいくも前にあるのは闇であり、それ以外には何も無い。皆から恐れられている場所がこの程度かと思い、彼はガツカリした。所詮は生き物達が近寄らないだけで、それに尾びれ背びれがついて人間に伝わったのだと思った。

十分ぐらい歩くと、前方は行き止まりになっていた。

普通の人ならここで落胆の色を浮かべるだろうが、アダムは違った。この洞窟の先に何かを感じたのである。何かを感じたとはいえ、前方にあるのはただの岩。だが彼は諦めなかった。やっと何かを見つけたことができたのだ。そのチャンスを逃すわけにはいかない。

『オオオオオ』

そんな時、声が聞こえた。しかも、耳に聞こえたわけではなく、頭に響いたのだ。

「だ、誰だ」

アダムは身体を震わせながらいった。所詮は親に頼らないと生きていけない八歳の少年。怯えるのは無理なかった。

『貴様はなぜここに来た』

今度は頭にはっきりとした声が響いた。

恐怖のあまりアダムはその言葉の意味を理解するのに時間がかかった。そして、その質問に答えた。

「力が欲しいからだ」

『お前の中は空っぽだからだなあ』

得体の知れない何かは不適に笑った。

『なぜお前に魔力がないか解るか』

「……………」

『それはお前が器だからだ』

「…………器」

『そう、お前は器なのだ。俺を入れるためのな』

その言葉にアダムは驚愕した。そして質問を投げかけた。

「それはどういうことだ」

『やはり何も知らんのだな。ならばこの俺が教えてやろう。まずそのためには俺のこととお前の祖先の話をしなければならない』

祖先、という言葉にアダムは反応した。なぜここで祖先の話が関係してくるのか疑問に思ったが、それは話を聞けば解るので、質問せずだまって聞くことにした。そして、得体の知れない何かは話し始めた。

『それは今から約二百年前のこと。とある家に一人の男の子がいた。その子は溢れんばかりの魔力を持っていた。元々親が魔法者として

優秀だったので別段おかしくはなかった。しかしその子は異常だった。親の魔力性質は少なからず子に受け継ぐものだが、彼はまったく親と似ていなかった。その事に彼は頭を悩ませた。それから結局答えが出ずに何年もの月日が経った。その間彼は実力を付けていき、ついには親をしのぐ強さになってしまった。そして彼はついに国で一番の実力者に上り詰めた。そうなる環境は一変し、周りには人が群がるようになった。平穩を求めていた彼は次第に周りが鬱陶しくなり戦うことをやめてしまった。しかし力がある異常彼は注目の的だった。そして彼は決意した。力を放棄することを。そのために彼は誰も寄り付かないこの山のこの洞窟に力を封印することを決めた。彼は力を身体から除き、封印した。その時彼は力の正体に気付いた。俺が現れたからだ。俺は話した。俺とお前は一心同体、二人で一人だと。彼は腑に落ちないようだった。なぜお前が俺の中にいたのかと質問した。俺は答えた。その答えに納得いった彼は俺にいった、今までお前のおかげで色々助かった。だけど今後は君と一緒にはいられない、と。そして俺はお前と同じように孤独になったのだ。もう一人の俺である彼は名はバーク・モルガン。お前の祖先だ」

アダムは驚きを隠せなかった。自分の最も尊敬する祖先バーク・モルガンの名前が出たのだから。

「二人で一人とはどういうことだ」

「バークもお前と同様に器だったのだ。俺を入れるためのな」

「なら何でバークさんが器に選ばれたの」

「それは魔力検査を受ける前、好奇心旺盛だったバークはこの山に来了。その時彼には魔力がなかった。雲行きが怪しくなり、ついには雨が降り出した。そのためこの洞窟に雨を防ぐために入った。そこでバークは磁石に引き寄せられるかのように洞窟の奥まで来た。その時俺は自分の器が来るのを待っていた。器に入らないと外の世

界を見ることができないからだ。そしてそれが目の前に現れたのだ。器となる条件は俺の血が流れている者だ。それはこの世で一人しかない。そして俺はバーグの中に入った。元々器として生まれたのだからそこに俺が入っても何も違和感を感じなかった。そのため彼は何も気付かなかった』

「ちよつと待て。なぜ人間であるバーグさんの身体にお前の血が流れている」

『それはバーグが俺の分身だからだ。さっきもいったように俺とバーグは二人で一人なのだ。お互いが一緒にいなければ意味がない。封印されていた俺はどうか外に出るために自ら器を作ろうとした。そして約百年かけて器を作りだすことに成功した。しかし、作ることは成功したが、その器がどこかに飛ばされてしまったのだ。器を作ることは一度しかできん。だから俺は器が俺の元に来るのを待った。どうやら飛ばされた器は一人の夫妻に拾われて育つていったようだ。その器がバーグなのだ』

アダムは内心ビクビクしながら訊いた。

「ならバーグさんは人間じゃないの」

その答え次第で自分達や祖先が人間なのかどうか解る。アダムは願いながら答えを待った。

『バーグは純粋な人間だ。器となるものは人間でなければならない』

その答えに胸を撫で下ろした。

『お前はどつするのだ』

アダムはハッと我に返った。力を求めてここに来たのだから答え

は既に決まっている。だがその前にもう一つやらなければならない事が彼にはあった。

「その前にもう一つだけ教えてくれ。なぜ俺の祖先や家族は魔力があつたのに俺にはないんだ」

『それはお前が選ばれし者だからだ。バーグは永遠にここに俺を閉じ込めておくのは酷だと思い、自分の子孫に俺の器が生まれるように仕組んだ。いつ生まれるかは操作できなかったが、今お前はここにいる』

「なら俺とお前は一緒にあるべきなのか」

『そうだ。だがお前が拒否するなら俺は諦めよう』

もし今ここで自分が拒否すれば、いつ彼の器が現れるか解らない。もしかしたら二度と現れないかもしれない。彼は自分と同じく長い間一人ぼっちだったのだ。彼の気持ちが解らないわけがない。だからこそ自分は彼と一緒に歩みたいと思った。ここから出して一緒に外の世界を見たいと思った。そう思うと、ただ力を求めてここに来ただけのアダムの気持ちが一緒にいたいという気持ちに変化した。

「俺の気持ちは決まった」

息をスーッと吸う。

「俺はお前とともに歩む。俺の名はアダム・モルガン改めアダム・バーグ。汝とともに歩もう」

『よくいった少年。俺の名はハンニバル。汝とともに歩もう』

そうお互いがいった刹那、周りが何かによって覆われた。それは闇でも光でもなく、完全な無である。

久しぶり（前書き）

間が空きすぎました。

久しぶり

この世界は三つの国が存在する。魔族の地アフィラインと人間の地オーガスタ、そして天上にいる天使族ホーリーである。

アフィラインとオーガスタは古来より対立していた。ホーリーには戦いを嫌うものが多いので基本的以上の二カ国には干渉しない。

オーガスタにはバーグ・モルガンという英雄がいた。

アフィラインが一度大群を率いてオーガスタに攻め込んだとき、国民は自分達は死ぬんだと諦めていた。そこに希望の光をさしたのがバーグ・モルガンである。

彼の巨大な力によってアフィラインはお手上げ状態だった。

勝ち目がないと見たアフィラインは即座に兵を戻して、撤退した。オーガスタの国民は、国を救った英雄として彼を奉った。そのことがモルガン家を名家と呼ばれるようにした一つの要因である。

その英雄に協力した三人の人物。

一人はバーグの良き親友のデイル・ゲイ。

一人は国が誇る強者ブライアン・チャージ。

一人は女性ナンバーワンの強さを持つシェリー・ジェンナー。

彼らも国を救った英雄の仲間として尊敬され、名家と呼ばれるようになった。

その後は特にセンセーショナルな事は起きずに長い月日が過ぎていった。

アダムは大きな門の前に立っていた。門の扉は開いており、まるで引き入れるように風が吹いていた。そんな風にはびくともせず、黒髪の少年はただ門の中を見つめていた。これから自分の通う学校がどのようなのかと確かめていたのだ。しかし見るだけでは校舎の外壁が新しくきれいということしか解らない。もしかしたら中は存外古いのかもしれない。外見は良いけれども、中身が悪いというのはよくあることで、それに当てはまるのが人間だ。

そんな考えを抱きながらも門の中に入っていく。周りには人は誰一人としておらず、この広い敷地がまるで荒野のように思えてくる。荒野と違う点を上げるとすれば、緑豊かな木々や花々が軒並みに植えられていることである。

門から校門までは五十メートルほどで、道は五十メートル走のタイムを計れるほどきれいに整えられている。ここ最近は粗い道しか歩いていない自分にとってこのような道を歩くのは久しぶりなため、噛み締めるようにゆっくりと歩いた。

校門に入るとまず職員室を目指した。最初の登校なのだから行くのは当然である。職員室に入って最初に眼に入っただのは頭の固そうな教師陣である。その中でもやんわりとした雰囲気で三十代前半ぐらいの黒髪をオールバックにしゃや垂れ眼ぎみの男性教師が近づいてきた。

「君がアダム・バーグかい？」

「はい」と、冷淡な声でいう。

「そうか、なら話は早い。さっそく教室に行こう。あと自己紹介も考えておいて」

男はアダムの冷めた口調を特に気にせず、雰囲気通りのやんわりとした感じでいった。

カツ、カツ、カツ

教室へ向かっている二人の足音が小刻みよく一定のリズムで聞こえる。

そんな足音だけが支配する空間で最初に口を開いたのは男性教師であった。

「そういえば、まだ私の名前をいつてなかったな。私の名前はリース・フォレット。担当教科はいずれ解るだろう」教師はニコツと微笑んだ。

自己紹介をまだ考えていなかったアダムは自分も先生のようにやんわりといい、その後に軽く笑えばいいのか、と思った。そこでまだ自分が肝心なことを先生に訊いていないことを思い出した。

「俺のクラスは何組なんですか？」

教師は何かを閃いたように驚いた。「そうだ、まだ君のクラスをいつていなかったな。君のクラスはノーマルクラスの9組だ」

この学園はクラスがスーパー特別クラス、特別クラス、ノーマルクラスの三つに分けられている。それぞれのクラスでは優秀な生徒が一つの組に固まるということではなく、バランスが良いように編成されている。スーパー特別クラスの中には1〜3組、特別クラスは4〜7組、ノーマルクラスは8〜10組というように構成されている。

アダムとしてはとりあえず目立つことのないクラスに編入が決まっただけでホッとした。

「クラスには色々な人がいる。力を誇示しようとしている人もいれば、あまり目立たないようになっている人もいる。まあ、とにかく様々な思考を持った人がいるから自分の価値観にあった人を見つけて仲良くしろよ」

教師らしい言葉を述べ終わった後は、まるで見計らったようにタイミングよく賑やかな教室の前に着いた。

「緊張していると思うが堂々と自己紹介するんだよ」

子どもじゃないんだからそれくらい解ってるよといわんばかりの不機嫌な表情を見せたが、幸いリースには見えなかったようだ。

「じゃあ、俺が先に入って生徒に説明するからそれまで待ってて」

「はい」

そういうと、リースは教室に入っていった。その途端先刻までざわついていた教室内が一気に静かになった。あの穏やかそうな先生も存外生徒には恐れられているのかもしれない。そう思うとさきほどの自分の考えに信憑性がさらに増したように思えた。

「よし、突然だが今日は転校生を紹介する」

リースがそういうと先刻まで静かだった教室が一転して騒がしくなった。

「先生、転校生は男子ですか、女子ですか」と、男子がいう。

「残念ながら男子だ」と、いった瞬間男子は落胆の色を浮かべた。

他のクラスの男女の比が半分ずつなのに対してこのクラスはどうしてか男子の人数がクラスの60%を占めている。そんな状況の中で男子が来ても嬉しくないだろう。女子は女子生徒が少ないこのクラスで男子が一人増えても特別喜びはしない。

「でも、先生。この時期に転校生って珍しくないですか」

今現在は入学式から二ヶ月経った六月。その中途半端な時期に転校してくるなんて確かにおかしい。疑問を抱く生徒がいても不思議ではない。しかし、先生自身もその疑問に対する答えは持ち合わせていないため答えることはできない。

「それは俺にも解らん。本人に訊いてくれ」

教室が釈然としないままリースは転校生を呼んだ。

「おい、もう入っていいぞ」

リースに呼ばれるまでアダムは過去の記憶を思い出していた。

最後に学校に行ったのはいつだったかな、と。

アダムにとって学校とは学びの場ではなかった。人との交流を深める場だった。

自分が学校に行っていた時は、友だちとバカ騒ぎしたり、悪戯したり、怪我したりと色々なことがあった。しかし、国内一優秀といわれるこの学校でそれが通用するのか。この生徒はただでさえ頭が良く、エリート意識も強い。クラスにレベルこそあるけれど、優秀なものには変わりない。そんな奴らが在席する学校で自分がやっているいけるのか、どうしても不安になってしまう。

生まれた時は誰もが純粹で真っ白だ。しかし、成長していくにつれて人は染まっていく。それがいい色なのか、悪い色なのか、それは解らない。人はいつからあの時の純粹で優しい気持ちを忘れて傲慢で醜い気持ちになってしまふのだろうか。優しさだけでは生きていけない、そう感じたのだるか。

「おい、もう入っていいぞ」

リースの呼び声にアダムは身体を震わせた。教室の戸に手をかけ、開けた。

入室すると、眼前には幾分ばかりか男子が多いクラスが眼に入った。男女ともに品定めするような眼で見つめ、ひそひそと話している。それが自分の容姿に関することだということは何となく解る。自分の見た目は決して見よいのよいものではないと思っている。そ

れが人の目にどう映るのかは解らない。良く映ってるかもしれないし、悪く映っているのかもしれない。ただ、人の容姿をとにかくいうのは許せない。それが面白がっていつているのであればなお更だ。もし、自分が醜い容姿だったらということは考えないか。きっと、自分は醜くないのだから解らない、そう思っているのだろう。自分が経験したこととしか理解できず、相手の立場に立って考えることをしないでいる。そういう人たち本当の意味では優秀ではないのだと思う。

「じゃあ、まずは自己紹介からしてもらおう」

そういわれ、教壇の前に立ち、始めた。

「初めまして、アダム・バーグといいます。今後よろしく願います」

そういうと、頭を軽く下げた。やはり自分にはあの自己紹介は無理だったようだ。前方からはパチパチと形だけの拍手が聞こえる。

「よし、アダムの席はあそこだ。解らないことがあったら隣の人に訊いてくれ」

リースは窓際が一番後ろの席は指差した。指された方向へ行き、席に座った。ああ、久しぶりの感触だ。特別座り心地が良いわけではなく、決して悪いわけではない椅子が昔を思い出させてくれる。「よし、あとは授業まで好きにしていぞ」

そういうと、周りの生徒が案の定アダムのところに群がり始めた。このクラスに変な時期に転校してきた新参者にも少しは興味があるのだろう。

周りの生徒の質問には答えられる範囲では答え、答えにくい場合の質問には言葉を濁した。生徒も興味がなくなると次第に各自の席へ戻っていた。すると、隣の生徒が話しかけてきた。

「初めまして、僕はクリス・トーマス。よろしく」

笑顔を向けてくるクリス。自分もここまで笑えたらいいのに。

「よし、次の授業は移動教室だよ。僕が案内するから行こうよ」

く。
久しぶりすぎる授業に多少緊張を抱きながら、クリスに着いてい

ああ、何とも小さい背中だ………

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8046x/>

空虚な少年

2011年11月15日17時39分発行